ミュージアムコレクション 62

大型臼と竪杵

●コレクション・データ

時　　代　弥生時代中～後期

調　　査　大型臼　唐古・鍵遺跡 第69次調査

　　竪杵　唐古・鍵遺跡 第63次調査

発 見 年　大型臼：1999年／竪杵：1997年

大 き さ　大型臼：直径47.3㎝、高さ48.1㎝

　　竪杵：長さ119.3㎝、最大径8.9㎝

展示位置　第2室「弥生の住まい」

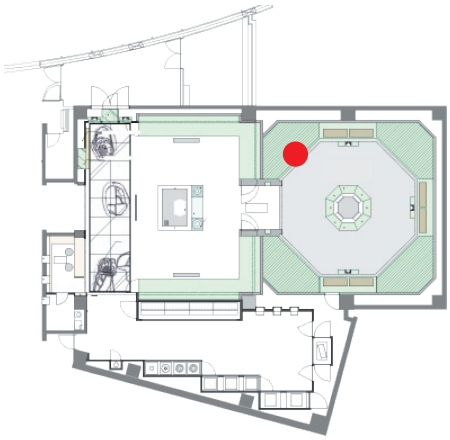
弥生時代には、稲作の開始とともに鍬や鋤などのさまざまな農具類もいっしょに大陸から伝播しました。今回紹介する大型臼と竪杵も、実った穀物の脱穀や精白、製粉、餅つきなどに使われる重要な農具の一つです。銅鐸絵画に表現されている大臼に向かい合う2人の女性が杵で脱穀している風景は有名です。

さて、唐古・鍵遺跡の大型臼は、直径50㌢弱でトチノキの大木を輪切りにし、上部を深く彫りくぼめて臼にしたものです。臼の側面はくびれをもつように細くえぐっています。特徴的なのは、そのくびれ部を持ち手になるようにブリッジ状に4ヵ所削り残し、装飾的にしていることです。難しい細工をしており、類例の少ない優品の一つといえるでしょう。

一方、臼とセットになる竪杵は、直径10㌢弱の丸棒の中央部を握り部にし、両端を搗き部とするものです。杵にはこのような竪杵と、搗き部が柄に対して直角につく横杵の2種がありますが、弥生時代から中世にかけては前者のものが主流です。

唐古・鍵遺跡の竪杵は、弥生時代の竪杵の特徴である握り部の中央部に算盤玉状の凸帯を削りだしています。搗き部である両端は、平らでなく尖り気味になっています。この特徴は、セットとなる臼との関係で注目でき、大型臼の搗き部は平底でなく、竪杵と対応するように丸底になっているのです。この両者の搗き部の形状から、これらは製粉でなく脱穀・籾摺り用の機能であったと考えられます。

穀物の脱穀は、調理するための第一段階の大変な作業であったと思われますが、銅鐸絵画にあったように2人の女性が向かい合い、そして豊作を喜び歌いながら脱穀していた風景が浮かんできそうです。



ミュージアム上面図と展示位置